

After De Chirico

Architecture on Canvas

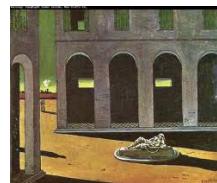
00



“絵画上建築”

建築が他の媒体上に突如、単なる背景ではなく、建築が主役として出現することがある。僕はそのような媒体の中でも絵画に興味を持っていた。どこまでいっても平面でしかない絵画に建築的な強度を感じるということはどのようなことなのか。どう足掻いても実物ではない絵画を題材に修士制作を始めることにした。それは絵画という建築の外側に建築的な眼差しを向けることから建築を逆照射する試みと言えるかもしれない。

De Chirico “1912-1914”



“After De Chirico”

対象をデ・キリコに選んだ。他にもホッパーやハンマースホイなど建築を主題にした画家はいたが、キリコはホッパーたちと違い、オリジナルがない。キリコは言ってみれば「机上の建築家」である。しかも、完全なる「手書き」の建築家だ。そこで、100年前の建築家を参照するように、建築家としてのキリコを参照し、僕の手に残してみたい。そして、キリコの絵画を建築のポキャブラリーとして変換してみたい。そのためにその中でも「通りの神秘と憂愁」をモデルにする。

この制作はキリコの絵画に描かれた建築を僕の手に残そうとした試行の連続であり、アーカイブである。そして、それをドローイング、モデルとして起こした。



“Mystery and Melancholy of Street”(1914)

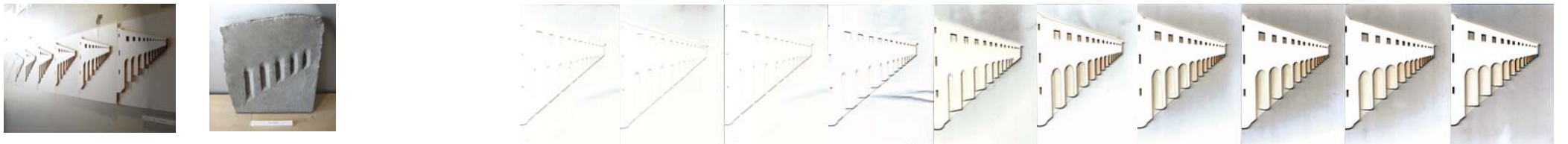
キリコの代表作である「通りの神秘と憂愁」を選び、トレースを経て、キリコの特徴でもある舞台性をもとに「記憶の劇場」としてモデル化する。これは建築モデルであり、一つの劇場であり、都市のモデルとして計画する。

一枚の絵画をもとに幾つかの媒体を通して、私的ワークショップを行った。キリコという他者の絵画を自分に取り込むためのスタディ。
忠実に再現した「模写」から表面や色彩を変更してみる。それを二次元から少し次元を上げてレリーフ化していく。絵画という画家の主観を薄めていく作業。

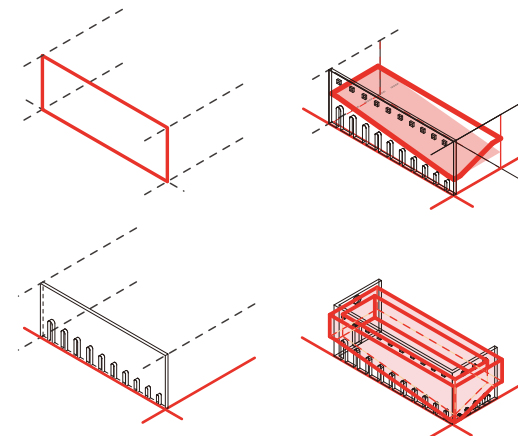
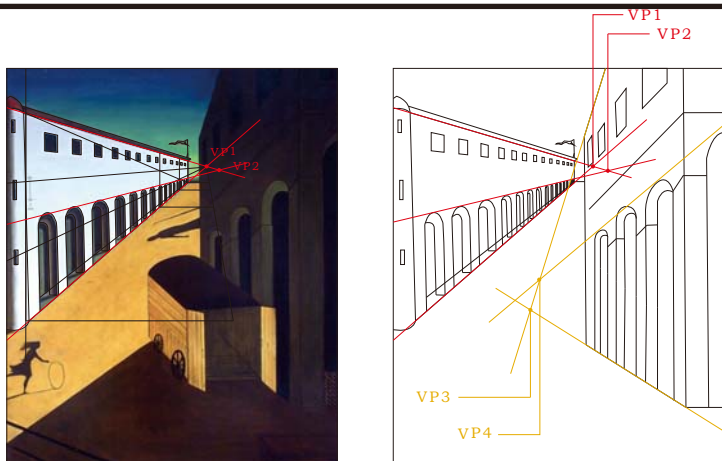
Painting



Relief



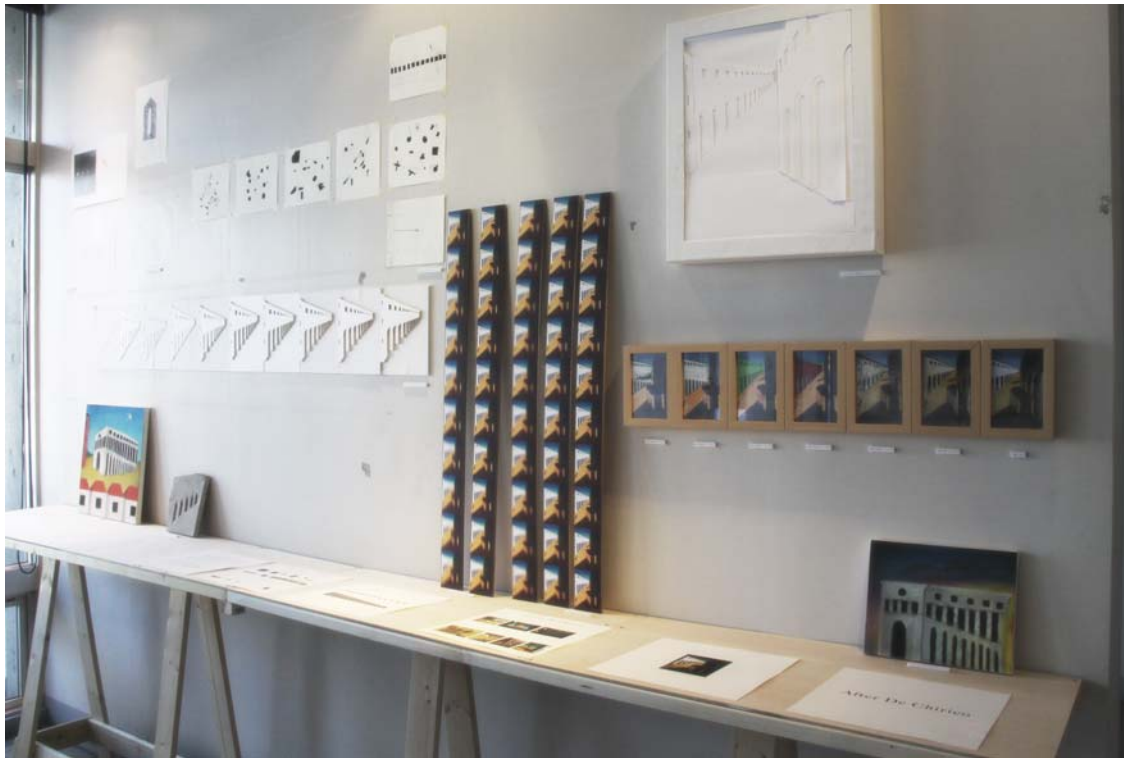
Elevation Analysis



この対象の建築には消失点が二つある。その二つの消失点をもとに立面を構成してみる。するとアーチが少しずつ小さくなっていくものと急斜面に立ち上がるもの、二つの姿が現れる。

その二つの姿から「斜路」を持った立面として立面を立ち上げる。

Study Images



展示会の際に展示したスタディの数々。絵画という媒体から複数の媒体に変換してみることで、絵画以外にこの建築がどのように映るかを試した。そのことでこの建築の原形へ向かうことを目指した。前述したような絵画の模写や変形、レリーフも含め、写真を用いた変形、ドローイングを一同に集めてみる。

様々な媒体を通したスタディを一同に見てみることでこの建築が絵画から離れて、一つの全体像が現れるように思う。

そのようなプロセスは連続的なものではない。手探りに建築を炙り出すような解剖実験のようなものである。キリコという他者が創作した建築に僕が介入するための作業とも言えるだろう。このような作業を経て、モデル化を行うきっかけをつくる。

